

落らく葉よう隻せき語ご
ことばのかたみ

未来をになう人たちへ

「これからだってもっと生きにくい時代が続く
だろう。でもあんな子供たちがいる限り、未来
は大丈夫だろう……」全身全霊で書きつづら
れた、次の世代へのメッセージ。 青土社

多田富雄

10 若き農民 考える農業

松本明さんは、宮城県石巻市で化学肥料や農薬に頼らない農業を推進している農家である。松本さんの農法は、徐々に若い農民の関心を集め、「松本塾」として東北、北海道の農民を中心に、この国の食糧や環境を守る運動に発展している。この夏、松本さんの話を聞く機会があった、深く頷くところがあった。

彼らの「松本農法」を覗いて見よう。

まず安易に害虫駆除のため、農薬などを散布しない。害虫を寄せ付けない天然物を利用するので。ミントを畑の四隅に植えたり、その抽出物を噴霧すると、野菜にアブラムシや幼虫がつかなくなる。ルーという西洋ハーブを畑の周りに植えて、ダニや蛾、アブラムシ等の発生を防ぐ。蕨の干したのは、倉庫に鼠を寄せ付けない。こうして野菜や生産者を、農薬曝露

から守るのである。もともと昔から、世界の農民が実践してきた伝統的知恵である。

こうして副産物として得られたハーブは、勿論商品になる。私は、松本さんにもらったバジルの葉の強烈な香りで、毎朝文字通り目を覚ました。美しく逞しい葉だった。

そのほか、ウコンを根きり虫の増殖を抑えるために植えるとか、セージやタイムを青虫など幼虫類の虫除けに植えたり液肥にする。これらもいい副収入になる。

産業廃棄物の鶏糞も高温処理すると、リンの豊富な肥料に変わる。製材所から大量に出るおが屑も、発酵させ肥料に変える。

同様に産業廃棄物の帆立貝の殻を粉碎加工すれば、悪臭を防ぎ腐敗菌などの有害菌の増殖を防ぐ。またその結果、カルシウムのリッチな肥料ができるのである。

農協に支配されて、言われるままに化学肥料や除草剤を投入して、土地を疲弊させてきた農民が、自分で考える農業を始めたのだ。農民の伝統的知恵を生かして、安全で美味しい野菜を供給するという夢に、私は感動した。

もうひとつ例をあげよう。作物の成長を早める窒素肥料は、硝酸態窒素として作物中に残留する。日本では基準値導入の声が上がっても、なぜか野放しにされている。海外、特にヨーロッパでは、安全な野菜のパラメーターの一つとして、残留硝酸態窒素の基準値は

二五〇〇ppmとされているが、わが国では一万ppmを超えたものも稀ではない。これも農協の指導で、窒素肥料を大量に投入している結果である。硝酸態窒素の多量摂取によって、ヘモグロビンの酸素運搬能力が阻害される「ブルーベイベー」と呼ばれる乳幼児の病気が起こったことは記憶に新しい。

松本さんたちは、作物の消費する硝酸態窒素量を計算し、使い切る量しか与えない。それによって、連作障害が発生せず、今までは無理とされていた高効率の栽培を可能にした。何よりの証拠は、松本さんからいただいた野菜のみずみずしさ、おいしさである。きゅうりも茄子もトマトもほうれん草も、スーパーで買ったものとはまるで別物であった。言い換えれば、いかに普段まずいものを食べているかを思い知らされた。

松本塾は、福島県鮫川村に試験農場を作り、全国規模の啓蒙運動を展開しつつある。まだ規模は小さいが、独自の流通ルートも動き始めている。その土地特有の、希少品種を発掘栽培することにも情熱を傾けている。

今、食の安全、食糧自給率の低下に、国民は大きな危機感を持っている。高温多湿の農業国日本が、自給率四〇%などとは、砂漠の国の民には信じられないだろう。

農協の一元的支配によって疲弊した農業、猫の目のように変わる農政。そこから脱却するために、内発的に考える農民が生まれた。農産物のみならず、農民自身を救おうとしている

松本塾の實踐に、応援の拍手を送りたい。目指すは、豊葦原の瑞穂の国の復活である。

